

# 北宋辺境の軍糧支出

西 奥 健 志

## 緒 言

宋朝は、契丹・西夏と対抗する必要から辺境地帯を中心に多数の兵力を配備した。当初三七万八〇〇〇人に過ぎなかった廂禁軍は、建国から八〇年が経過した慶暦年間には一二五万九〇〇〇人にふくれあがり、辺餉問題は、宋朝財政上の最重要課題となった（表1参照）。宋代の財政が使用価値の調達と支出を中心として、極めて計画的に運営され、辺境での軍事物資獲得を至上目的とし、財政上の優遇措置・手形制度・専売制度等を利用して物流を組織したことは、宮澤氏の指摘するところである。<sup>①</sup>ただ、氏は宋朝が江南から北辺への財政的物流を組織したという大枠は示したが、具体的な物流のありかたについては言及していない。

筆者は、先に開封から西北部への軍糧輸送について言及し、輸送費を分析する事によって、辺境での軍糧調達は商人が開封・江南から糧草を輸送し納入するというように直接かわるものではなく、現地の商人を中心として展開し、開封・江南の商人は、京兆府等で商品を販売する事によって得た錢を塩鈔の購入資金とし、或いは現地で糧草を購入・納入し塩鈔に換えることによって、糧草納入の一部を担い、開封・江南地方から西北辺境地帯への国家的物流は、糧草を中心とするものではなかったという見解を示した。<sup>②</sup>蛭田氏は、「河北と陝西とは、それぞれが直面する外圧にあたらざるを得なかったが、画一的な政策では対応しきれず、地域に即した施策を組み合わせる必要

表1 北宋期の廂・禁軍の推移

時期	総数	禁軍	廂軍	典拠
太祖開宝	378000	193000	185000	『文献通考』152
太宗至道	666000	358000	308000	『文献通考』152
真宗天禧	912000	432000	480000	『文献通考』152
仁宗慶曆	1259000	826000	433000	『文献通考』152
仁宗嘉祐	1181532	693339	488193	『端明集』22
英宗治平	1162000	663000	499000	『文献通考』152
神宗熙寧		568688		『宋史』卷189
神宗元豊		612243		『宋史』卷189
哲宗元祐		550000		『長編』472

\*嘉祐の廂軍数以外は、総数と禁軍数をもとに推定した値である。

があった。」という見解を示し、河北・陝西の自給的軍糧運用について言及している<sup>③</sup>。黄河の水運があり、平坦な地形が広がる河北と、陸上輸送を中心として険しい地形の多い河東・陝西への物流が、江南↓開封↓北辺・西北辺というような単純な形態をとらないことは明らかである。国家による北辺・西北辺への物流の編成という大枠を意識しながらも、地域に即した財政的物流のあり方が検討されるべきであろう。

財政的物流の全体像と地域性の解明は、単に物流という側面にとどまらず、専売制度・手形制度との関係という意味においても重要である。財政的物流が辺境での軍事物資の獲得を目的として編成されている以上、物流の全体像を知るためには、物資が「何処で」「どれだけ」消費されるか、具体的には三路でどれだけ消費されたかが解明されなければならない。本稿では、河北・河東・陝西における軍糧の消費量について検討し、北宋の補給・物流体制を研究していく基礎としたい。<sup>④</sup>

## 第二章 兵士の俸給と軍事費

国家財政に占める軍事費の割合は、時期によって多少の違いはあると思うが、『古靈先生文集』卷一八「論冗兵簡子」に、

臣、治平二年天下入る所の財用の大数を観るに、都て約繙錢六千余万。養兵の費、約五千万。乃ち是れ、六分の財、兵は其の五を占む。

とあるように、八割に達する。<sup>(5)</sup> 兵士が多数駐留する三路では、財政支出のより多くの部分が軍事費として支出されたと思われ、辺境における糧草消費量の解明には、中心部分をなす兵士の俸給に対する考察は不可欠である。

『宋史』兵志にみえる兵種は、禁軍・廂軍・郷兵・蕃兵の四種類である。従来、辺境に配備された兵力は「約一〇〇万」と総称されたが、詳しい内容はほとんど考察の対象とされてこなかった。「一〇〇万」といつても、禁軍・廂軍・郷兵・蕃兵、様々な兵種が混在しているのが実情である。史料上でも「禁軍〇万」・「廂軍〇万」と明確に表す例はほとんどなく、「兵〇万」「戦兵〇万」など兵種を限定しない場合が多い。兵力の中心となるのは禁軍であったが、慶暦の初めには、『宋史』卷一九一 兵五 郷兵二によると約四二万人の義勇が、『武経總要』前集 卷一八上によると一五万五六〇〇人の蕃兵と三万二五八〇人の弓箭手が駐留していた。郷兵・蕃兵のほとんどが三路に配備されていたことを考えれば、総数約六〇万人は無視できる数字ではない。各兵種の俸給について、錢糧に限って簡単にまとめると以下になる。

『欽定四庫全書』卷二三「論国計出納事」には、中等禁軍の俸給内容が細かく列挙されている。一月に錢五〇〇錢（年六貫）と糧一・五石（年一八石）、一年に随衣錢三貫が支給された。馬軍については、さらに馬料二五・二石と馬草二五二束が支給された。

地域によつて若干の違いはあるが、陝西・河東・河北・京西・京東・淮南に駐留する廂軍が受け取る俸給は、『宋史』卷一九四 兵八 廩給之制によると、一月に醬菜錢一〇〇錢（年一・二貫）と糧一・二石（年一四・四石）、一年に錢二貫である。<sup>(6)</sup>

郷兵は、出戌時或いは訓練時だけ錢糧が支給されるのが一般的で、河北の忠順は一〇月〜二月までの間一日糧二

表2 嘉祐年間の財政状況

	歳収	歳支	軍事経費	両税収入
錢(貫)	36,822,541	33,170,631	9,941,047	4,932,991
匹帛絹綢(匹)	8,745,535	7,235,641	7,422,768	2,761,592
糧(石)	26,943,575	30,472,708	23,170,223	18,073,094
草(束)	29,396,113	29,520,469	24,980,464	—

禁軍 69万3339人

廂軍 48万8193人

升が、陝西保毅は出戍時に月六斗が支給された<sup>⑦</sup>。郷兵の内、陝西と河東の辺境地帯に配備された弓箭手は、種糧や農具の支給と貸与に関する記述は見られるが、武器や食料に関しては自弁するのが基本であった<sup>⑧</sup>。

蕃兵は、族長クラスに対する錢の支給事例は見られるが、一般の兵士に対する錢糧の支給に関する記事は見られない<sup>⑨</sup>。兵士に対する俸給の支給はなかったと思われる。

定期的に俸給が支給されたのは禁軍・廂軍だけで、他の兵種は一時的な支給があるか全く支給されなかった。『端明集』巻二「論兵十事」には、嘉祐年間のものと思われる廂禁軍数・財政収支が記述されている(表2参照)<sup>⑩</sup>。嘉祐年間の馬数については、古川氏が治平の戦鬪用馬数を一〇万〜一一万匹と推定しており、数年の時間差はあるが、嘉祐年間も同様であるとし、一〇万匹と仮定する。以上の史料と設定をもとにして禁軍と廂軍が必要とする錢糧の総額を推算すると、以下のとおりである。

禁軍 歩軍 糧一二四八万一〇二石 錢六二四万五一貫

馬軍 料二五二万石 草二五二〇万束

廂軍 糧七〇二万九千九百七十九石 錢一五六万二千二百一十七貫

合計は糧料二二〇三万八千一百一十石、錢七十八〇万二千二百六十八貫で、糧料は軍事費の九五％、錢は七八・五％にあたり、草は一〇〇％を上回っている。郷兵が消費する糧は、包拯が「これを屯駐駐泊就糧兵士一月の費と比べれば、郷兵一歳の用に充つ。」と述

表3 河外堡寨年間糧消費量

	兵士数	糧(石)	平均
麟州	4061	48233	11.88
鎮川堡	1200	10600	8.8
健寧寨	2788	27600	9.9
中侯寨	727	6430	8.8
百勝寨	1026	9960	9.7
清塞堡	1777	?	
府州	6732	126500	18.79
合計	18311	229323	

\* 麟州については『欧陽文忠公集』  
卷115「論麟州事宜劄子」により修正

べ、張方平が「その数、百万斛に啻ならず」と述べるように、禁軍の一二分の一或いは全体で一〇〇万石以下と軍事支出の一割にも満たない。錢と糧については、軍事費のほとんどが、草についてはすべてが禁軍と廂軍の俸給であつたということになる。辺境での糧草支出を推算する場合、廂禁軍の糧草消費量を求めれば、ほぼ実状を捉えることができる。しかし、草の用途については、防城用や燃料として使用される場合も数百万束にのぼり、調達方法は、秋税の折納・和糴の外に、野草を刈り取つて馬草に供する場合もあつた。<sup>⑬</sup>どこまでが統計上に反映されているか疑わしく、推測することも困難であるため、本稿では扱わない。

以下、三路に配備された禁軍・廂軍の数について考察し、糧料の消費量を推測する。神宗の熙寧七年以降全国的に更戍制から將兵制への兵制改革が行われるため、更戍制の時期を考察の中心とする。

## 第二章 糧の支給について

軍糧支出の概数を求めるときに用いられる俸給一八石×禁軍数という方法は、これまで疑問を持たれることなく用いられてきた。しかし、個々の事例を細かく分析すると、糧の支出が兵士数に一八石をかけた場合ほど大きくならないことに気づくはずである。本章では禁軍に対する俸糧の支給額に注目する。

『欧陽文忠公集』卷一一五「麟州五寨兵糧地理」には、河東の府州を含めた麟州五寨の禁軍数・糧消費量が細かく記述されている。整理すると表3のようになり、府州を除くと、兵士一人の糧の平均支給額は一八石を大きく下回る。表4は、『包孝肅奏議集』卷八「請移冀博深三州兵馬」をもとに冀・博・深三州の兵馬を真定府・大名府・懷州等に移動させた結果、削減された兵士一人あ

表 4 冀博深三州削減量

州名	料錢 (貫)	糧 (石)
冀州	3.38	10.3
博州		13.27
深州		9.07
三州平均	3.38	10.88

たりの錢糧の額を示したものである。俸糧の支給額は禁軍一人につき一八石であるから、削減量もそれに準じるはずであるが、ここでも一八石を下回っている。これらの事例を検討するかぎり、兵士一人あたりの糧の支給額は、一八石を下回ると思われる。河北・河東・陝西の三路における糧の消費量分析に一八石を用いることは、有効な方法とはいえない。何故このようなことがおこるのか。北宋の兵制と密接な関係がある。北宋前期の禁軍は、更戍制と言われる形式を採用し、その下では大きく二つのタイプに分類された。平時において、辺境防衛や治安維持のために、家族を伴わないで二・三年を任期として地方に駐留する禁軍を「駐泊」・「屯駐」と呼び、家族を伴って地方に駐留する者、或いは西北辺の場合、契丹・西夏という外敵に対峙する必要があるから、現地で募集され、現地で就食する者を「就糧」と言った<sup>(15)</sup>。

屯駐・駐泊禁軍のように、本拠地を離れて他地域に出戍する場合、俸給はどのように支給されたのか。彼らは家族を伴わない出戍であるから、すべての俸給を兵士自身が受け取れば、残された家族は生活維持できない。『長編』巻六六 景德四年七月壬午の条に、

上、軍士の外役、即し廩給の半ばを留めて家を贍さば、多くは飢寒給せざるを致すを以て、特に優恤す。

とあるように、廩給の半ばを家族の元に残している<sup>(16)</sup>。宋代の兵士の俸給については、小岩井氏の詳細な研究がある。氏は主に南宋の大軍兵士を考察の対象としたが、その中から北宋禁軍の俸給に関する言及をまとめると以下のようになる<sup>(17)</sup>。

- ① 北宋の兵士に対する俸給は、衣・糧・錢からなる本俸と臨時的に支給される加俸からなる。
- ② 出戍時の廩給方法は、本俸より支給されるか加俸として支給された。

表5 北宋前期禁軍指揮配置

	建國前	太祖	太宗	真宗	仁宗	創置年不詳	合計
京師	146(82)	210(103)	409(141)	426(156)	469(156)	7(6)	476(162)
京畿路	6(5)	26(5)	117(39)	137(47)	195(49)	13(12)	208(61)
京西路	6(6)	27(6)	91(18)	105(21)	156(25)	9(3)	165(28)
京東路	0	11	64	66(1)	140(1)	0	140(1)
河北路	28(27)	37(34)	75(59)	147(109)	251(141)	3	254(141)
河東路	0	2	41(39)	80(43)	160(49)	0	160(49)
陝西路	0	1	12(11)	90(11)	322(90)	4	326(94)
その他	0	3	12	43	195(3)	0	195(3)
合計	186(120)	317(148)	821(307)	1094(388)	1888(518)	36(21)	1924(539)

\*建國前の場合は、146が全指揮数、( )は騎軍。

\*本表は、『宋史』巻187・建隆以来之制より作成。設置後に増加した指揮については、推算を行って分類した。例えば、振武は咸平5年に40指揮が配備され、後に41指揮が増置された。『宋史』には、仁宗末の配備状況しか記されておらず、咸平5年の状況が不明である。そのため、仁宗末の配備比率(陝西39 河北42)を参考にし、咸平の状況を推算した(陝西19 河北21)。同様の作業は、久保田和男氏も行っている。推算を行う際の処理によって若干のズレはあるが、ほぼ同様のものとなっている。久保田和男「宋都開封の禁軍軍営の変遷」(『東洋学報』74-3・4 1993)参照。

### ③加俸の支給は、北宋の末に定着した。

氏の見解に従うならば、北宋の屯駐・駐泊禁軍の俸給は、末期を除いて、本俸の一部を割いて支給されていたことになる。

三路を本拠地とする就糧禁軍の指揮数は、最盛期でも全体の四〇％に満たない(表5参照)。また、三路に配備された禁軍の内、最前線の州軍を本拠地とする就糧禁軍は、『宋史』巻一八七 兵一 建隆以来之制によると、河北が二五四指揮中九四指揮(二六％)、河東が一六〇指揮中三二指揮(二〇％)、陝西が三二九指揮中一二三指揮(三七％)となり、全体では三三％である。<sup>(18)</sup>最前線の州軍に駐留する禁軍には、三路以外の地域から移動してきた禁軍だけでなく、陝西・河東・河北の南部から移動してきた禁軍も多数含まれていた。つまり、辺境に駐留する禁軍の多くは、路外からの就糧または路南部から移動してきた部隊で、実際に支給される俸給は、家族への支給分を除いたものとなる。辺境地帯での軍糧消費量が兵士数ほどに大きくならない理由はここにある。それでは、どの程度の糧が支給されたのか。『長編』巻一二五 宝元二年是歳の条に、

今防辺の東兵は、人ごとに月に米七斗五升を受く。

とある。「東兵」とは、陝西以東の地からやってきた駐泊・屯駐禁軍のことであり、彼らは一月に七斗五升、本俸の半分に当たる年九

石が支給された。『河南先生文集』卷二四「申和顧人修城狀」にも、

金明駐する所の兵士、合に請すべき口食二勝半をもつて、細計したるに、白麴一斤半なり。若し麴餅を作らば三箇、一日の食に充つ。<sup>(19)</sup>

とある。金明寨に駐留する兵士は、一日に口食二升半(年九石)<sup>(20)</sup>を受け取っていた。兵士が一日に必要なとする米の量は、二升程度である。北宋の後期に支給された加俸も、出界の戦兵には糧米二升が<sup>(21)</sup>、差出の軍士には將校三升・兵士二升が支給された。<sup>(22)</sup>先にふれた支給例・削減量も一部を除いて年間七〇石(一日二升〇二・七升)の間で推移している(表3・4参照)。これまでの事例を検討すると、出戍禁軍一日の糧の支給額は二升から二升半と考えられる(年額七・二石〇九石)。

俸糧は兵士が必要とする量だけ支給され、その他は家族に支給されたと考えられる。出戍禁軍に対する俸給の支給額を明確に規定した史料は、未だ見いだせない。しかし、兵制が更戍を前提としている以上、禁軍の移動は常に想定される事態であり、当初から何らかの形で規定が存在していたと考える方が妥当である。一日に二升〇二升半という支給例は、地域や状況が限定される特殊な事例と考えるよりは、一般的なものとして考えることができる。本稿では、屯駐・駐泊禁軍の俸糧支給額を年九石(一日二・五升)とする。

### 第三章 廂禁軍の配置状況と糧の消費量

本章では、考察の対象時期を禁軍・廂軍が最も増加した慶暦年間とし、廂禁軍の実数と配置状況を把握し、三路での糧料の支出額を考察する。

禁軍数を考察する前に、一指揮あたりの兵士数について言及しなければならない。一指揮五〇〇人が定員ではあるが、兵員の死亡や逃亡等によって、実数は定員に満たない場合が多かった。<sup>(23)</sup>真宗の末には、兵士四三万二〇〇〇



人に対して一〇九四指揮で一指揮の人数は平均約三九五<sup>24</sup>人。仁宗の末では、兵士六九万三三三九人に対して一九二四指揮で一指揮の人数は平均約三六〇人。慶暦年間については、兵士数は確認できるが、指揮の実数が定かではない。ただ、二〇〇〇指揮を越えていたと考えられることから、一指揮の人数は平均四〇〇人前後と思われる。神宗朝に入って、大幅な指揮の削減が行われたことを考えると、仁宗末年の一指揮の人数は、それまでに比べ、大幅に減少していたと思われる。真宗から仁宗中期の間は、一指揮四〇〇人前後と考えて問題ないだろう。本稿では一指揮四〇〇人として計算する。各州に配備された禁軍指揮数についても、慶暦年間の実数は、表5に見えるより多くなると思われる。しかし、実数の推定は困難で、多くとも一割強であろうから（註25参照）、表5の仁宗末年の数をそのまま使用する。

仁宗朝の禁軍増加は、対西夏戦争の激化という事態に直面し、陝西や河東の国境に多くの禁軍を配置したことが要因とされるが、新たに三路に配備された指揮数は、増加数の半分強に過ぎない（七九四指揮中四一六指揮）。増加した禁軍の半数は、地方から三路への出戍によって低下した当地の治安維持を主目的として配備された<sup>27</sup>。いかは三路に出戍したと思われるが、多くはなかったと考えられる。また、開封に配備された禁軍も、首都に駐留しているという特性上、多くが三路に出戍したとは考えられない。慶暦五年の時点で、開封とその周辺では月に三四万石の軍糧を消費していた<sup>28</sup>。仮に、出戍兵士の家族への支給額を九石とし、在京禁軍の総数を二七万三六〇〇人、実際に駐留している禁軍をXとして方程式をたてると、つぎのようになる<sup>29</sup>。

$$18x + 9(2736000 - x) = 4080000 \quad x = 179733$$

在京の禁軍数は約一八万人となり、一〇万人を下ることがあったとは考えられない。仁宗天聖以降に開封と三路以外に増置された指揮数は二七七、一万八〇〇人である。西夏との戦闘によって、多くの部隊が増強・創設されたが、三路以外の地域にも二〇万人以上の禁軍が駐留していたと思われる。三路の禁軍は、どんなに多く見積もって

も六〇万人を越えたとは考えにくい。この点を念頭に置いて、三路に配備された禁軍数を考察する。

歐陽修が河北転運按察使に就任した慶暦四年八月には、河北に「廂禁軍馬義勇民兵四十七万七千人」が駐留していた。<sup>30</sup> 同時期の義勇については、「今河北見管義勇十七万有余人」と記述している。<sup>31</sup> 残り約三〇万人が廂禁軍馬民兵となるが、「民兵」という記述があるように、河北には義勇以外にも郷兵が駐留していた。慶暦二年に強壯二九万五〇〇〇人の内七割が義勇となったが、残りの強壯は存続した。実数は定かではないが、三割がすべて強壯として残ったとすると八万八五〇〇人となる。<sup>32</sup> 他にも忠順・強人砦戸という郷兵が駐留していた。『長編』巻一五〇慶暦四年六月戊午の条に、

今無事の時、河朔已に駐泊・屯駐・就糧兵十八万、本城五万有り。用兵の時に至りて、約十万人を増さば、則ち戦兵足る。

とある。慶暦四年には駐泊・屯駐・就糧兵一八万人と廂軍五万人が駐留していた。民兵を七万とすれば、禁軍一八万・廂軍五万・義勇等一七万の合計四七万人となる。慶暦四年以降の禁軍の推移は、英宗の時に一五万人という記述がある。<sup>33</sup> 「用兵の時に至りて、約十万人を増さば、則ち戦兵足る。」とあるが、慶暦元年から二年にかけて契丹との関係が悪化し、或いはこの時期に河北の禁軍は三〇万人近くに達したのかもしれないが、史料上では確認できない。河北の就糧禁軍は一〇万一六〇〇人、屯駐・駐泊禁軍は全軍の四四%の七万八四〇〇人、廂軍は五万人と推定できる。

『歐陽文忠公集』巻一一五「論宣毅万勝等兵筭子」によると、歐陽修が河東に派遣された慶暦四年当時、現地には駐泊三万二〇〇〇余人・就糧六万二七〇〇余人、合わせて禁軍九万四七〇〇〇余人余、廂軍三万人が駐留していた。

陝西は、『長編』巻一二二 慶暦元年六月己亥の王堯臣の言に、

鄜延路六万八千・環慶路五万・涇原路七万・秦鳳路二万七千余、州軍県鎮城寨に分屯す。

とある。慶暦元年には、陝西四路で二二万五〇〇〇人余の兵力が確認できる。この内、涇原路の七万人は、弓箭手二万人と禁軍五万人の合計である。弓箭手は成立当初から国境地帯の寨堡に番戍して守備に当たることを任務とした。他の地域についても同様に現地の禁軍と共同して守備にあたり、兵士数に組み入れられたと考えられる。<sup>(34)</sup>慶暦の初めには、三万二五八〇人の弓箭手が陝西に駐留しており、禁軍は約一八万人となる。永興軍路（駐留指揮数七〇）の記述がなく、若干の上乗せが必要であると思われるが、二〇万人を大きく越えることは考えにくい。康定元年には、すでに涇原路七万人・鄜延路六・七万人の兵力が配置されている。<sup>(36)</sup>慶暦二年にも、四路合わせて二二万五〇〇〇人という記述が見え、翌三年には、環慶路だけではあるが「兵馬五万」と記述されている。<sup>(38)</sup>康定元年以降、慶暦四年一〇月に西夏との和議が成立するまで、史料上には大きな兵力の増減はない。英宗の時に一九万人という記述があり、<sup>(39)</sup>陝西の禁軍は二〇万人前後で推移していたと考えられる。廂軍は、『長編』巻一九六・嘉祐七年二月癸卯の薛向の言に、

陝西の兵、廂・禁軍凡そ二十五万。

とあり、治平の禁軍数が一九万人であるから廂軍数は約六万人となる。他地域からの移動も考えられるが、地方にあつて役使に従事することが主たる任務であつた廂軍が禁軍ほど大規模に移動したとは考えにくく、慶暦年間においても六万人前後であつたと思われる。陝西の就糧禁軍は一三万四〇〇〇人となり、駐泊の数は全軍の三五%、六万九六〇〇人、廂軍は六万人となる。

河北・河東が慶暦四年、陝西も四年までは大きな増減の記事は確認できない。慶暦四年に三路に配備されていた禁軍は、四七万四七〇〇人となる。屯駐・駐泊禁軍の総数が一八万人と推定できることから、三路での糧消費量は六九二万四六〇〇石、廂軍は一四万人、二〇一万六〇〇〇石となり、合計八九四万六〇〇石となる。<sup>(40)</sup>禁軍の減少に比例して馬料の消費量も減少したと考えれば、嘉祐の馬料総額が二五二万石であるから、慶暦の推測値は三〇〇万

石となる。<sup>(1)</sup>慶暦五年の開封の馬料消費量が年間四八万石、開封以外の地域の馬がすべて三路に移動したとすれば、消費量は二五〇万石前後となる。仁宗末の馬軍の配置状況を参考に（表5参照）三路それぞれの料消費量を推測すると河北：一二五万石、河東：四二万五〇〇〇石、陝西：八二万五〇〇〇石である。三路の総消費量は糧料約一一五〇万石、各路の消費量は以下ようになる。

河北 四五〇万四四〇〇石

河東 二二七万三六〇〇石

陝西 四六六万二六〇〇石

三路といつても、南部の黄河や渭水流域から北部の契丹や西夏との国境線までの距離は、直線距離にして三〇〇（五〇〇km）前後に達する。河北を別にすれば、北部は山岳地帯が多く、輸送が困難な地域である。三路の内部を北部辺境地帯とそれ以外の地域とに分けて考える必要があるだろう。辺境に本拠地を置く就糧禁軍は、全体の三三％、すべての禁軍が辺境へ移動することは無いと思うが、仮にすべての禁軍が移動するものとして計算すると、実際に辺境で消費される禁軍の軍糧は、五一万七〇〇〇石となる。<sup>(2)</sup>辺境での糧料消費量は、禁軍が最大で約五〇〇万石、馬料の総額が二五〇万石であったから、廂軍がすべて辺境に駐留したとして、約九五〇万石である。

三路に駐留する禁軍は全体の六割、廂軍は三割と従来いわれてきたほど多くはない。史料の関係から誤差が生じる可能性は否定できないが、本章の初めで確認したように、三路の禁軍数が六〇万人を越えていたとは考えにくい。仮に一〇万人の禁軍が新たに加わったとしても、すべて屯駐・駐泊禁軍であるから、三路で増加する糧は九〇万石である。郷兵の消費する糧を張方平の言に従って一〇〇万石とすれば（註13参照）、糧料消費量は最大で一三四〇万石となる。

## 第四章 糧料支出の実状

第三章における考察から得た推定値は、禁軍・廂軍がすべて辺境に移動したという仮定の下で最大値を示したもので、ほとんど起こり得ない事態であるといつてよい。西夏の台頭という事態に対して、数年の内に約四〇万人もの禁軍を配備したが、緊急時の対応が当地の事情や効率的な配置を考慮したものであるはずはなく、結果的に兵力の増加に力点を置いた配備となったことは否めない。<sup>(44)</sup> 本章では、第三章の推定に修正を加えつつ、より実状に近づける。

三路の禁軍は、最前線の各城塞で辺防の任にあたつた。しかし、契丹や西夏との関係が緊張した時期を除けば、常時多くの禁軍が辺境に駐留していたわけではない。韓琦は、西夏との和議が成立した翌年の慶曆五年には、陝西四路の駐兵の内、六分を辺に留め、二分を東に帰し、二分を近裏州軍に留めるように主張した。<sup>(45)</sup> 陝西の辺防について張方平や宋祁は、三月以降收穫が終わるまでの間、西夏が進入してこないことを指摘し、期間中は兵馬を内地の州府に就食させることを主張した。<sup>(46)</sup> 実際に、駐泊禁軍を近裏州軍に移駐させ、<sup>(47)</sup> 料草の消費を省くために軍馬を移動させている。<sup>(48)</sup> 河北では、駐泊・屯駐・就糧禁軍の兵士を帰營或いは京東の曹・鄆州等に分屯させている。<sup>(49)</sup> 禁軍を北辺から南に移動させ、分屯・就食させるといふ方法は、北宋を通じて行われ、真宗期以降数多く見られる。宋祁は、禁軍を内地に就食させることによつて、「边上州軍愛惜得年支糧草」、「兵馬有休息之時」、「兵士到内地州府亦為裏費」、「関陝之民免得転般糧食」の四つのメリットがあると主張した。

三路の南部は京東路や京西路と地理的に近く、黄河の水運を通じて結びついている。特に河北は、御河の水運にも恵まれ、黄河を挟んだ南側の京東路と関係が深く、就食するだけでなく、同地域からの運糧も行われた。<sup>(50)</sup> 陝西・河東・河北の辺境地域の生産力の低さはだれもが指摘するところであるが、陝西南部の関中平野・河東の汾水流域

・河北南部の邢州・洛州や懷州・衛州等は、生産力も高く交通の便も良い土地である。<sup>(37)</sup> 辺境地域に比べれば、糧草を入手することは容易く、運搬する手間や費用、さらに入中を行う場合に支出されるプレミアムの減少等の効果も予想できる。<sup>(38)</sup>

禁軍の移動によつて生じた軍事力の低下を補うために、宋朝は郷兵や蕃兵の利用を推進した。范仲淹は東兵を削減して、蕃兵・弓箭手・土兵で防衛にあたらせる事を主張し、韓琦は辺境の堡寨のうちで、小規模な寨柵は経略部署司に委ね、人員兵士三〇名を留める外に弓箭手を置いて防衛させるように請うた。<sup>(39)</sup> 第一章で指摘したように、郷兵は禁軍に比べて消費する糧が大幅に少なく、蕃兵や弓箭手は俸給の支給をほとんど考慮に入れる必要はない。辺境地帯での郷兵・弓箭手・蕃兵の増加が軍糧支出の極端な増加につながることはない上、戦力としても禁軍と同等或いはそれ以上に重要視された。<sup>(40)</sup> 『宋史』巻一九〇 兵四によると、弓箭手は治平の末には陝西四万六三〇〇人・河東七五〇〇人が配備され、慶暦の初めに比べて陝西では四割近く増加している。また、熙寧七年に導入された將兵制においては、蕃兵・郷兵・禁軍が同一の部隊として編成している。<sup>(41)</sup> 軍事力における禁軍の比率は低下する傾向にあった。

政策を個別のものとして検討すれば、軍事的或いは財政的に大きな効果を上げるものとは思えない。しかしながら、それらを一体のものとして考えたとき、路全体或いは地域内における糧の消費は、辺境地域への集中という形から、路内各地域への分散化・均等化という形にシフトしていったと思われる。補給を行う場合に最も困難なことは、一カ所で一時期に大量の物資が消費されることである。交通の便がよく、生産地からも近い場所であるならともかく、輸送が困難な北方の辺境地帯での兵力の集中は、補給線に過度な負担をかける。戦力の分散は、一カ所で物資の大量消費を防ぐ手段としては非常に有効である。実際に路内で消費される糧料の総量には大きな変化はないと思われるが、辺境での消費量は、大幅に減少する。

宋祁が主張するように三月から八月末までの六ヶ月間、禁軍の半数を内地に就食させれば、辺境での消費量は人糧一〇六万八三〇〇石・馬料六二万五〇〇〇石減少する。『長編』卷一八四 嘉祐元年十月丁卯の条にみえる薛向の建議によると、河北の辺境一一州軍で一年間に消費する糧料は、粟一八〇万石・豆六五万石であつた。<sup>87</sup> 粟は穀物の穀物であると考えられるので、脱穀すると約一〇八万石となる。馬料と思われる豆六五万石を加えて、糧料一七三万石である。消費量減少の直接の原因は、禁軍・廂軍の削減にあると思われるが、慶曆から治平にかけての禁軍数の減少は河北全体で三万人に過ぎず、禁軍の帰営や移屯、郷兵の利用を行った結果が反映されていると考えられる方が妥当である。

河北の事例をもとに、河東と陝西の辺境での糧料消費量を三章の推定値との対比から推測すると、約八七万石・約一七九万石となり、三路の総計は四三九万石となる。西夏との関係は、契丹との関係に比べて安定を欠いていたため、陝西の状況を河北と同一視することはできないが、対外的な関係が緊張した時期を除けば、辺境での糧料消費量が五〇〇万石を大きく越えることはなかったと思われる。禁軍数は、治平には陝西一九万人・河北一五万人と若干減少し、<sup>88</sup> 熙寧には就糧禁軍の定額は陝西一〇万人・河北七万人と慶曆に比べて三割近く減少する。<sup>89</sup> 廂軍も大幅に削減され、陝西では三万人に縮小された。<sup>90</sup> 路外への就食も考慮にいれれば、三路全体での糧料消費量は、一〇〇〇万石を下回ったと考えられる。

宋代の禁軍数の推移は、慶曆をピークに減少に転じる。禁軍数の最大値は慶曆の約八二万人。真宗末の禁軍数は四二万人、仁宗の末には約六九万人、神宗熙寧期は約五七万人である。禁軍は真宗末から慶曆にかけて二倍に増加し、熙寧には最高時に比べて三〇%減少し、以後大きな変化はみられない(表1参照)。慶曆の禁軍数は、明らかに他の時期に比べて異常であつて、宋代の一般的な状況とはいひ難い。むしろ、仁宗末期以降の状況を一般的なものと考える方が妥当であろう。

## 結 語

北宋前期、三路における糧料の支出額は、宝元・慶曆にかけての混乱期を除くと一〇〇〇万石を下回り、国境地帯では五〇〇万石前後と推定できる。『長編』卷二一四 景祐元年五月乙丑の条には、

河北は歲ごとに芻糧千二十万を費やし、其の賦入は十の三を支え、陝西は歲ごとに千五百万を費やし、其の賦入は十の五を支え、自余悉く給を京師に仰ぐ。

とある。この記事は、陝西や河北が補給を京師に仰いでいる状況を伝えているとされる。しかし、そこには賦入とあり、和糴や折納は含まれない。宋朝の財政は、和糴や折納或いは市糴を前提として維持・運営されている。『端明集』卷二二「論兵十事」によると、糧の歲収二六九万石の内、兩稅收入は六七%の一八〇七万石に過ぎず、草に到つては全てが兩稅以外の方法によって調達された(表2参照)。例えば、江南からの上供米の三分の一は和糴によって確保され、陝西では年に草一〇〇〇万束以上が折納によって調達された。<sup>(83)</sup>一〇〇〇万石という穀物は、決して少なくはない。しかし、多くの部分を他地域の穀物に頼らなければならないほど、多くはない。嘉祐年間の兩稅斛斗の總額は一八〇七万石である。島居氏によると、東南六路の兩稅斛斗の總額は八〇〇万石、實徵額は四〇〇万石である。<sup>(84)</sup>華北の五路と東南六路以外の地域が占める兩稅の割合が一割にも満たないことを考えれば、華北地域の兩稅斛斗と和糴を加えた収入は一〇〇〇万石を越えていたと考えられる。国家の財政誘導と開封・江南・現地の客商の存在なしに辺境での軍糧獲得政策の維持はあり得ないという点、最前線だけで補給が不可能であるという点を否定するつもりはない。ただ、辺境という限られた地域に視点を限定するのではなく、もう少し大きな視点で、例えば路や路より大きな区域で税物の動きを捉える。また、いくつかの地域市場、幾人かの客商の手を経ることによつて辺境への財政的物流が構成されているという視点に立てば、また違った見方ができるのではないだろうか。<sup>(85)</sup>



再考の余地は十分にあるように思われる。

註

- (1) 宮澤知之『宋代中国の国家と経済』（創文社 一九九八）、第一部第一章参照。財政的物流の詳しい内容については、『中国専制国家の財政と物流 宋明の比較』（第一回中国史学会国際会議研究報告集『中国の歴史世界——統合のシステムと多元的發展——』東京都立大学出版会 二〇〇二）、七、八頁参照。
- (2) 拙稿「北宋の西北辺における軍糧輸送と客商」（『鷹陵史学』二七 二〇〇一）
- (3) 蛭田展充「宋初陝西の軍糧補給政策」（『史滴』一九九九七）、「宋初河北の屯田政策」（『史観』一四一 一九九九）参照。唐代においても、丸橋充拓氏が北辺での軍糧政策について相当自立的な財政運用を行っていたと指摘している。丸橋充拓「唐代後半の北辺財政—度支系諸司を中心に—」（『東洋史研究』五五— 一九九六）、「唐代後半の北辺における軍糧政策」（『史林』八二— 一九九九）。
- (4) 斯波氏は、軍隊が消費する人糧馬料の総消費量を三〇〇〇万石をかなり上まわっていたと推定し、陝西・河東・河北・開封の糧草消費量と軍隊の配置状況を図に示した。しかし、開封を除いて、糧草消費量の合計を示したにとどまり、詳しい分析は行っていない。斯波義信『宋代江南経済史の研究』（汲古書院 一九八三）、二三四、二四四頁参照。
- (5) 宋代の軍事費が財政支出の八割前後に達していたことは、汪聖鐸『兩宋財政史』（中華書局 一九九五）、七七頁を参照。
- (6) 『宋史』によると、兩浙・江東西・荆南北・福建・広東西の廂軍は、醬菜錢が支給されない他は、六路と同様。四川の四路は、糧一・二石と小鉄錢一六貫が支給された。
- (7) 『宋史』卷一九〇 兵四 鄉兵一。  
保毅 上番人月給米六斗 仲冬、賜指揮使至副都頭紫綾錦袍、十將以下宅綾袍。
- (8) 忠順 自十月悉上、人給糧二升、至二月輸半營農。  
小笠原正治「宋代弓箭手の研究（前編）」（『東洋史学論集』二 一九六〇）参照。
- (9) 王曾瑜『宋朝兵制初探』（中華書局 一九八三）、二一六、二二〇頁参照。
- (10) 註(1)、宮澤前掲書。四三頁参照。
- (11) 古川新平「北宋前半期における廢監租佃の問題（一）（二）」（『史淵』四四・四七 一九五〇・五一）を参照。
- (12) 『包孝肅奏議集』卷八「請那移河北兵馬事」。
- (13) 『葉全先生文集』卷二「論天下州縣新添置弓手事宜」。
- (14) 日野開三郎「北宋時代の所謂「草」について」（『日野開三郎東洋史学論集』第一三卷 一九九三 三一書房）所収。
- (15) 小岩井弘光『宋代兵制史の研究』（汲古書院 一九九八）、一九、二二頁。

- (16) 註(9)、王前掲書、三一七〜三二三頁参照。
- (17) 註(15)、小岩井前掲書、四二八〜四三一頁参照。
- (18) 最前線の州軍の特定は、林瑞翰「北宋之边防」(『台湾大学文史哲學報』一九一九七〇)の慶暦の防線によった。
- (19) 嘉慶一三年長洲陳氏刊本『河南先生文集』により、『將合譜口食之勝半』を『將合譜口食二勝半』とし、『斤』の前に一を補った。
- (20) 衣川強「官僚と俸給―宋代俸給について統考―」(『東方學報』四二 一七九一)、史繼剛「宋代軍用物資保障研究」(西南財經大學出版社 二〇〇〇)、四〜一一頁参照。
- (21) 『長編』卷三一五 元豐四年八月丙辰。  
詔。応出界戰兵、除家糧外、各支口食糧米二升并塩菜錢。
- (22) 『長編』卷三六四 元祐元年正月庚子。  
詔。諸軍差出者、毎日特給口食、將校三升、兵給二升。
- (23) 註(9)、王前掲書、二九〜三〇頁。
- (24) 堀敏一氏は、建隆以来之制を仁宗の末年の状況とする。「五代宋初における禁軍の発展」(『東洋文化研究所紀要』四 一九五三)。
- (25) 『宋史』兵志によると宣毅・保捷・武衛の指揮数は、一七四・一三五・六七であるが、『長編』卷一六三 慶曆八年三月甲寅の張方平の言には、二八八・一八五・七四とある。『長編』の記述の方が、『宋史』の記述に比べ
- て一七一指揮多くなっている。皇祐以降に増加した禁軍の指揮数は、『宋史』兵志によると全部で四三指揮である(雄勇二・雄略一〇・寧遠三・有馬雄略三・威果二五)。
- (26) 熙寧の併営については、久保田和男「宋都開封と禁軍軍營の変遷」(『東洋學報』七四・一三・四 一九九三)を参照。
- (27) この時期、三路を除く京東西以下一路の兵力が関中に派遣され、その結果、これらの地域は戦力が不足し、治安維持にも事欠いた。中でも特に重要な京西・京東は郷民を以て官兵に変えることが主張され、江南にも治安維持を目的とした部隊が配備された。詳しくは註(15)、小岩井前掲書。第一編第一章参照。
- (28) 『宋全先生文集』卷二二「論京師軍儲事奏」。
- 臣慶歷五年權三司使、嘗取責到在京諸倉見在斛斗數人糧千三百萬石。是時每月約支三十四萬有餘石、計可備二年一十一日支遣。馬料三百二十萬石、是時每月約支四萬有餘石、計可備七年支遣。
- 在京及び府界の禁軍總數は、六八四指揮×四〇〇人＝二七萬三六〇〇人とした。
- (29) 『歐陽文忠公集』卷一八「論河北財産上時相書」。
- (30) 『歐陽文忠公集』卷一七「乞放行牛皮膠」。
- (31) 『宋史』卷一九〇 兵四 鄉兵一。
- (32) 『宋史』卷一九〇 兵四 鄉兵一。
- (33) 『端明集』卷二二 國論要旨 強兵。
- 真宗与北敵通和以後、近六十年、河北禁軍至今十五萬。陝西自元昊叛、増兵最多、今至十九萬。

(34) 『長編』卷一二八 康定元年七月癸亥には「今涇原正

兵五万、弓箭手二万」という記述がある。金成奎氏によると「正兵」とは、蕃兵と区別する意味で漢人兵士全体を指す場合と、単に禁軍だけを指す場合がある。今回は後者と考えられる。『宋代の西北問題と異民族政策』（汲古書院 二〇〇〇）、二四九頁参照。

(35) 『武経總要』前集、卷一八上によると、陝西各路の弓箭手は、涇原路二万一千九百七十八人・鄜延路一千二百一十一人・秦鳳路五千九百〇〇人である。涇原路の弓箭手数は『長編』の記述とほぼ一致することから、他路の弓箭手数も『武経總要』の記述に即したものと考えられる。そうであれば、涇原路だけが弓箭手を含んだ数であるとは考えにくく、他路についても同様とするほうが妥当であろう。

(36) 『長編』卷一二八 康定元年七月癸亥。

(37) 『長編』卷一二七 慶曆二年閏九月癸巳。  
今涇原正兵五万、弓箭手二万、鄜延正兵不減六七万。

然所以復守巢穴者、蓋鄜延路屯兵六万八千、環慶路五万、涇原路七万、秦鳳路二万七千、有以牽制其勢故也。

(38) 『長編』卷一四三 慶曆三年九月戊子。

環慶一路四州、共二十六寨、将佐数十人、兵馬五万。

(39) 註(33)、参照。

(40) 9石 × 180000人 = 1620000石

18石 × 294700人 = 5304600石

14.4石 × 140000人 = 2016000石

(41) 慶曆と嘉祐の禁軍数は、八十二万六〇〇〇人と六九万三

三三九人である。嘉祐の馬料消費量を二五二万石と推定したので、式を立てると以下のようになる。

826000 : 693339 = X : 2520000

(42) 註(28)、参照。

(43) 三路の就糧禁軍七四〇指揮の内、国境地帯に駐留する指揮は二四九指揮である。残り四九一指揮、一九万六四〇〇人分の糧の支給額は九石となる。すべての禁軍が国境に移動したと仮定するなら、国境地帯の禁軍の糧消費量は、一七六万七六〇〇石 (196400人 × 9石 = 1767600石) 減少する。

(44) 註(15)、小岩井前掲書。第一編第一章参照。

(45) 『長編』卷一五四 慶曆五年正月丙子。

又四路所駐兵、十分中宜留六分在辺、二分令東還、二分徙近襄州軍、其鄜延路徙屯河中府、環慶、涇原路徙屯邠州・永興軍、秦鳳路徙屯鳳翔府。

(46) 『案全先生文集』卷二三「請省陝西兵馬及諸冗費事」。

今境上堡寨、兵分力微、假如寇来、勢必不能出戰。如其守也。即随处土人自必足用。況春夏之際、戎人必無大舉。若每年三月以後、縁辺所屯東兵、一切抽向内地就食、至八九月復遣出戍。

『景文集』卷二八「減辺兵議」。

敵界自三月後、馬瘦放在草野、不能負重、関陝人皆知之、則背春向夏、敵不能大舉、其驗一也。敵無餽運、每入漢界、嘗因糧于中国。中国自三月以後、纔有麦熟、其禾稼未成、無糧可因、敵不能大舉、其驗二也。…中略…。臣欲乞朝廷詳度、許令於沿辺州

軍城砦、毎年自三月後、抽減一半兵馬入内地州府就糧、直至九月却元駐劄處、号為防秋。

- (47) 『宋会要』兵五十三 屯戍 慶曆六年五月。

徙陝西駐泊軍士月給錢糧多者、屯近襄州軍。

- (48) 『宋会要』兵五十四 屯戍 皇祐元年二月。

詔。陝西諸路經略司、徙屯馬軍近地、以省辺儲。

- (49) 『包孝肅奏議集』卷八「請那移河北兵馬事」。

欲望聖慈特出宸斷、宜論執政大臣、応沿辺及近襄州軍兵馬、除各留守外、其屯駐駐泊諸軍、或令帰營就糧、諸軍即分屯於河南兗・鄆・齊・濮・曹・濟等諸州。

- (50) 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』（吉川弘文館 一九六三）、三二九～三四三頁参照。

- (51) 程民生『宋代地域經濟』（河南大学出版社 一九九二）、二〇～二五頁参照。

- (52) 米の輸送には一〇〇里につき三二文の費用がかかる。州によつて大小があるので一概には言えないが、隣の州まで一〇〇里以上という場合は少なくない。それが数州となれば三〇〇～五〇〇里の間隔が存在し、輸送費は一〇〇文以上となる。二～三州南に移動するだけで、輸送費を大幅に削減できる。詳しくは註(2)、西奥論文参照。

入中に伴うプレミアムは、一般的には開封からの距離が長くなるほど多く設定された。日野開三郎『北宋時代の塩鈔について 附・交引鋪』（『日野開三郎東洋史学論集』第六卷 一九八三）、五〇～五六頁参照。

- (53) 『范文正公集』政府奏議下「奏陝西河北攻守等策」。

然後東兵三分中一分屯辺、以助土兵之勢。一分移入次辺、或屯関輔、以息辺餽餉之困。一分帰京師、以嚴禁衛之防。彼如納欵未變、則東兵三分中更可減退。又縁辺無稅之地、所招弓箭手、必使聚居險要、每一面指揮共修一堡、以完其家、与城寨相應。彼戎小至、則使属戸蕃兵暨弓箭手与諸寨土兵共力禦捍。

- (54) 『長編』卷二二六 康定元年三月癸未。

其沿辺堡寨、除自来係大寨広屯兵馬之处外、其余孤小寨柵、断自朝廷、委経略部署司、須得移那兵馬、分食旧積糧草、無使余義。然後并兵入城、只留人員兵士三十人、以為斥候。量事更差弓箭手防護。

- (55) 羅球慶「北宋兵制研究」（『新亞学報』三一 一九五七）、二〇八～二二五頁参照。

- (56) 註(34)、金前掲書。二三〇～二四二頁参照。

- (57) 薛向が河北都大提挙便糴糧草に就任したのは、至和二年十一月丁巳（『長編』卷一八二）である。本文中の建議は、至和二年十一月から嘉祐元年十月の間のもと思われる。

- (58) 註(33)、参照。

- (59) 註(26)、久保田論文参照。

- (60) 『長編』卷二一九 熙寧四年正月戊戌。

陝西都転運司裁定本路廂軍數。詔。減五千人、以三万人為額、省辺州冗食也。

- (61) 島居一康『宋代稅政史研究』（汲古書院 一九九三）

四〇六～四一六頁参照。

- (62) 『長編』卷五七 景德元年九月庚子

詔。陝西諸州今年秋稅折納芻千一百二万束、宜特免  
四百万、邠・寧等十九州軍秋稅每斗加官糶、計六十  
五万余石。

(63) 註(61)、島居前掲書。四〇六〜四一六頁。

(64) 『文獻通考』卷四によると、華北の五路と東南六路以

外の夏秋稅額は、四七八万二三九〇(貫・石・匹・

・)で、全体(五二〇一万九三九)の一割にも満たない。

(65) 後藤久勝氏は、商稅統計を分析し、行塩地とほぼ等し

い一〜二路程度の地域的市場圏の存在を指摘した。市場

圏の範圍は、氏が自ら述べるように、嚴密には商品によ

って異なるものである。特に軍糧補給という特殊な場合

においては、稅物との關係もあり、異なる範圍の設定が

必要であるが、参考になると思われる。後藤久勝「北宋

における商業流通の地域構造―『宋会要輯稿』所收熙寧

十年商稅統計を中心として―」(『史淵』一三九 二〇〇

二) 参照。

